

年中行事のしきたり

節分（せつぶん） 2月3日



- ▶ もともとは、立春・立夏・立秋・立冬など季節の改まる前日のことを指した

次第に立春の前日(2月3日)だけが節分になり、暦の上では翌日から春になる季節の変わり目は鬼などの妖怪や悪霊が集まり疫病や災いをもたらすと考えられていた

煎った豆は福豆といい、豆をまき自分の年齢の数(地域によりプラス1コ)食べることで邪気を追い払い、病に勝つ力がつくと考えられていた



年中行事のしきたり

節分（せつぶん） 2月3日

- ▶ 恵方巻は大阪を中心とした関西圏の行事ごとだった

恵方に向かい事をおこなえば吉 ⇒ 恵方に向かって願い事を念じながら
無言で食べる

一般的に具材は七福神から7種類とされているが、現在は多種多様に



年中行事のしきたり

ひな祭り 3月3日

▶ もともとは古代中国で、川に入り身を清める行事が日本に伝わったもの

室町時代の貴族の女の子の人形遊びの「ひない祭り」とあわさり、現在の原型になった

⇒ 一部地域に「流しびな」という風習は、子どものケガレをひな人形に移して、川や海に流したことから由来していると言われてている



年中行事のしきたり ひな祭り 3月3日

江戸時代になり、ひな祭りは庶民に広がり、ひな壇にひな人形を置き、桃の花を飾るという現在のひな祭りに近い形になる

桃の木は、中国で悪魔を打ち払う神聖な木と考えられていたため、ひな祭りで飾られるようになった



年中行事のしきたり

お彼岸（おひがん） 3月と9月

▶ **春分の日をはさんだ前後 3 日ずつの 7 日間 「春のお彼岸」**

最初の日「彼岸入り」 春分の日「彼岸の中日(ちゅうにち)」

最後の日「彼岸明け」

春分の日は昼夜の長さが同じで太陽が真西に沈む

⇒ 仏教で西方遥か彼方にある極楽浄土にちなみ、この日に仏事をおこなうようになった

「彼岸」 = 向こう岸 死者が成仏して住む西方の極楽浄土

「此岸」 = われわれが生きている煩悩に満ちた現世

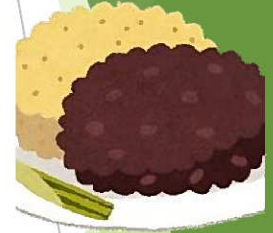
彼岸の意味するところは・・・一切の悩みや煩悩を捨て去り悟りの境地に達すること

年中行事のしきたり お彼岸（おひがん） 3月と9月

仏教思想と日本古来の祖先信仰が合わさり、お彼岸行事が生まれた

彼岸会（ひがんえ）という法要が行われ、読経・説法などを行う

祖先のお墓参り 仏壇の掃除 だんごやぼた餅を仏前に供える

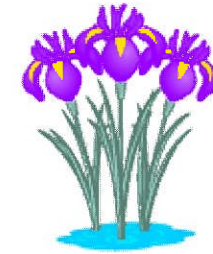


- ▶ 彼岸にお墓参りをして祖先の霊を尊び感謝をするという行事は日本独自のもの
- ▶ 秋にも秋分の日をはさんだ前後 3 日ずつの 7 日間で「秋のお彼岸」



年中行事のしきたり

端午の節句（たんごのせっく） 5月5日



▶ もともと日本では、端午の節句は女の子のお祭りだった

田植えが始まる前に早乙女と呼ばれる若い娘が「五月忌み(さつきいみ)」という田の神のために仮小屋や神社などにこもりケガレを祓い清めていた
⇒ 田の神に対する女性の厄払いの日であった



▶ 男の子の行事に変わったのは平安時代から

端午の節句で使われる菖蒲(ショウブ)が「尚武(武事を尊ぶこと)」や「勝負」に通じる
男の子が菖蒲でつくった兜で遊ぶようになり徐々に変化していった

年中行事のしきたり

端午の節句（たんごのせっく） 5月5日

- ▶ 江戸時代に五節供の一つの「端午の節供」に定められた

武者人形を家で飾るようになった

中国の「竜門を登って鯉が龍になった」という故事から鯉のぼりを立てるように



- ▶ 粽(ちまき)と柏餅(かしわもち)

粽 = 中国の屈原(くつげん)という高官の命日である5月5日に彼を俣び投げ入れたといわれている

柏餅 = 昔は関西圏には習慣としてなかった
新しい葉が生えないと古い葉が落ちない
⇒ 後継ぎが絶えないとの願い

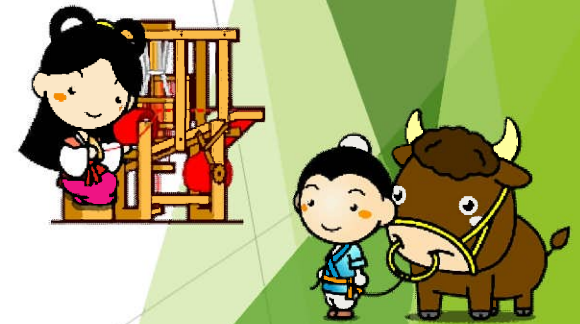


年中行事のしきたり

七夕（たなばた） 7月7日



- ▶ 日本と中国の伝説の合作だった
- ▶ 日本に古くから伝わる棚織津女(たなばたつめ)の話
村の厄災を除くため、機屋(はたや)にこもり天から降りてくる神の一夜妻となった
- ▶ 中国に伝わる牽牛星(けんぎゅうせい)と織女星(しょくじょせい)の話
天帝の娘の織姫は機織り(はたおり)の上手な働き者
彦星は牛飼いの青年で働き者
天帝は二人の結婚を認め、めでたく夫婦に
しかし・・・二人は互いに夢中になり働かなくなってしまった
天帝は怒り、二人を天の川を隔てて引き離した
年に一度、七月七日の夜だけ、天の川にかかる橋で会うことを許された
奈良時代に日本に伝わり、時代を経て現在の七夕祭りへと



年中行事のしきたり

七夕（たなばた） 7月7日

▶ 七夕送り 七夕流し

七夕翌日に笹竹や飾りを川や海に流しケガレを祓う
流しびなのように人形を流して送る地域もある



年中行事のしきたり

土用の丑の日（どようのうしのひ） 立秋前18日間の土用の日

▶ 土用とは、立春・立夏・立秋・立冬の前の18日間をいう

もともとは年4回であるが、現在は立秋前の18日間の土用を指す一年の中でもとりわけ暑い時期のため、江戸時代には「土用の丑の日」として重視

薬草を入れた風呂に入ったり、お灸をすえ、夏バテや病気回復に効き目があるとしてきた

年中行事のしきたり

土用の丑の日（どようのうしのひ） 立秋前18日間の土用の日

▶ 鰻(ウナギ)を食べる習慣

丑の日にちなんだ「ウ」のつく瓜(うり)や鰻、梅干しなどを食べると体に良いとされていた

▶ 背景には諸説あり

大量注文を受けた鰻屋が三日間かけて焼いて保存していたところ
丑の日に焼いた物だけが痛んでいなかった

⇒ 真夏でも悪くならない土用の丑の日の鰻を食べて夏を乗り切ろう

江戸時代の蘭学者「平賀源内」が、鰻屋の宣伝策の一環として広めた



年中行事のしきたり

お盆 旧暦7月に行う地域と新暦8月に行う地域がある

▶ **盂蘭盆会(うらぼんえ)ともいう**

日本古来の祖先信仰と仏教が融合した行事

釈迦の弟子である目連(もくれん)の母親が地獄に落ちて逆さ吊りにされ苦しんでいた

釈迦が「七月十五日に供養しなさい」と言い、手厚く供養すると母親は極楽浄土に

盂蘭盆会の行事が生まれ、日本に伝わり、祖先信仰と融合しお盆の習慣ができた

年中行事のしきたり

お盆 旧暦7月に行く地域と新暦8月に行く地域がある

▶ 祖先をお迎えし、送り出す

十三日の夕方

祖先の霊が迷わず帰ってこられるように家や寺の門前で迎え火をする
仏壇から位牌を取り出し盆棚に置き、果物や野菜、ぼた餅、ご飯と水を供える

十六日

家や寺の門前で送り火を燃やし、祖先の霊の帰り道を明るく照らして送り出す

盆棚に供えた野菜や果物を川や海に流す

= 『精霊流し』（九州地方）

灯籠にロウソクの目を灯して川や海に流す

= 『灯籠流し』（一部の地域を除く）



年中行事のしきたり

盆踊り

- ▶ 故人の霊や魂がこの世に戻ってきたのを供養するために踊ること

鎌倉時代、時宗(じしゅう)の開祖である一遍上人(いっぺんしょうにん)が広めた

念仏踊りと、先祖供養が結びついたのが始まりとされている



年中行事のしきたり

盆踊り

▶ 色々な盆踊り

行列踊りという列を組んで歩きながら踊る『念仏踊り』
代表的な物に『阿波踊り』

櫓(やぐら)を中心に輪になって踊る『輪踊り』は古代日本で神様が降りてきたところを中心に、輪になって踊った名残とされている



年中行事のしきたり

お月見 旧暦8月15日、旧暦9月13日

▶ お月見は2回あった

旧暦の8月15日を「中秋の名月(十五夜)」
旧暦の9月13日を「後(あと)の名月(十三夜)」



中秋 = 旧暦では7月～9月が秋で、8月を中秋と呼んでいたため
平安時代ごろ中国から日本へ 貴族階級から一般庶民に広がり
全国的行事に

十五夜と十三夜は2度必ず行うのが習わしだった
どちらか一方だけの月見は「片見月」「片月見」といって縁起の悪い
モノとされていた

年中行事のしきたり

お月見 旧暦8月15日、旧暦9月13日

▶ お供えはお団子？

昔は十五夜では豊作を祈って里芋を供えていたことから「芋名月」とも

十三夜では秋の収穫を祝い豆などの作物を供えていたことから「豆名月」とも

お団子は江戸時代後期頃から

子どもたちはお供え物をこっそり盗んでもOK！
「お月見泥棒」の風習は今も一部地域に残っている



年中行事のしきたり 年越しそば 大晦日



▶ 江戸時代の町人の間で始まった

そばのように細く長く長寿であるようにという願いが込められている

金銀細工職人が仕事場に飛び散った金粉をそばで練って作った団子で集め、その団子を焼いて金粉を取り出したことから「そばは金を集める」という縁起の意味もあった

実際に、当初は大晦日にそば団子を食べていた

薬味の刻みネギ

= 語源が「ねぐ」からきていて、「祈る」という意味があることからネギを添えることで、さらに長寿や金運を祈願するとも

